

# 江口榛一管見

## ——詩集『荒野への招待』が放つもの

森田 進

### I 江口榛一の位置

昭和詩史において、江口榛一の位置はどこにあるのだろうか。どの詩史を紐解いてもこの詩人の名前を見いだすことは容易ではない。その作品への芸術的評価がまったくといっていいほどなされていないことが最大の理由である。では何故芸術的評価がなされないのか、というと、江口榛一の存在自体がいれば触れたくないものとして遠ざけられているという事実が詩壇の一部にあったからである。

それは何故なのか。複雑な理由があるが、あえて一言でいえば、文学的戦犯（法律的に裁かれなかったにしても）であるという烙印、および戦後における奇矯としかいいようのない詩人の言動の故にである。

では、何故私があえて江口榛一を取り上げるのか。

私の学生時代に出会った詩人であり、その後の私のテーマである「詩とキリスト教」の射程距離の中に、ある陰影を刻み続けているからである。つまり、代表的詩集『荒野への招待』の芸術的再評価ではなく、キリスト教との関わりをめぐってこの詩集が放つもの、それを陰影といたいのであるが、を追及しようというもくろみである。

では、この詩人の生涯を紹介する。

『日本近代文学辞典』（講談社、一九七九、十）の佐藤房儀執筆の「江口榛一」の項目を全文引用する。

江口榛一 大正三・三・二四～昭和五四・四・一八（一九一四～一九七九）詩人。大分県耶馬溪の生れ。本名新一。明治大学文芸科に入り山本有三の感化をうける。昭和一二年大学卒業後、渡満し新聞記

者をする。ハルビンで歌集『三寒集』（昭和一五・一  
二 私家版）を刊行。「文学界」「新潮」に短歌や詩  
を掲載。復員後赤坂書店に勤務。戦争詩を多作した  
反省から聖書とリルケに心酔。聖書に啓示されて詩  
作活動に没頭。現代詩、文芸時代、九州文学同人と  
なり、一時「果樹園」を主宰。共産党に入党するが  
のち離党。二五年自作少年詩解説『あかつきの星』  
刊行。三〇年受洗するが教会の活動にあきたらず翌  
年キリスト教の個人的実践として地の塩の箱運動を  
提唱、一号を路傍にかける。三二年一月自叙伝『背  
徳者』（実業之日本社）を、三四年七月ルポルタージ  
ユ『地の塩の箱』（くろしお出版）を刊行。エッセイ  
に『幸福論ノート』（昭和四五・九 読売新聞社）  
『地の塩の箱』（昭和四九・一〇）  
とある。その他の文学辞典にも江口の項目があるが  
省略する。

次に、キリスト教の側から筆者の書いたものを紹  
介する。『世界日本キリスト教文学事典』（教文館、  
一九九四・三）からの引用である。

江口榛一 詩人（プロテスタント）。本名新一。大  
分県中津市今津に生れ、ほどなく下毛郡耶馬溪町山

移に移る。明治大学専門部文芸科時代に新美南吉と  
親交を結ぶ。また山本有三科長から多大な感化を受  
け、その影響は生涯に及ぶ。一九三七（昭和十二年）  
に卒業、満州（中国東北部）に渡り、『哈爾賓（ハル  
ピン）日日新聞』の記者になり、同紙に南吉のへ久  
助君シリーズや詩を掲載。江口自身は次第に軍国  
主義思想に傾きはじめて、『文学界』『新潮』などに  
戦争詩や短歌などを発表した。戦後引き揚げてから  
は、赤坂書店の編集者になり、『素直』（一九四六・  
九）に梅崎春生の短編「桜島」を掲載して、世に送  
り出した。その後、北海道で教師になり、更に幾つ  
かの転職を重ねた。やがて共産党に入党したが、の  
ちに離党。同時に戦争詩を反省、聖書とリルケに接  
近。五五年日本基督教団千葉教会で受洗。その後教  
団の教会に籍は置いたが、教会中心の信徒にはなら  
なかつた。スウェーデンポリからの影響も受けたが、  
かなり自己流の神秘主義的色彩の強いキリスト教的  
人道主義に立つて詩作した。翌年へ地の塩の箱運動（  
街頭や駅前）に箱を置いて、喜捨する人は金を入れ、  
困っている人は自由に取り出してよいという無償の  
精神の実践運動）を結成した。また、『月刊キリスト』  
の詩の選者も務め、全国規模のキリスト教詩人会の

結成も目差したが成功しなかった。

詩集『荒野への招待』（五九）は、江口自身を律しようとする道徳的倫理的欲求の強い詩集で、自伝『背徳者』（五七）を背景にして読めば、詩人の苦悩がどこにあるかが明らかである。更にエッセー『幸福論ノート』（七〇）、『地の塩の箱—ある幸福論』（七四）を通して、究極的な人生の意味づけに乗り出しているが、キリスト教はますます内面的な倫理色を強めている。

簡単すぎる紹介となったが、江口榛一の生涯の輪郭程度はつかめたといえるだろう。

ただし、だからといって、戦後の江口の精神の軌跡を、共産主義とキリスト教の間を揺れ動いた魂である、と受け止めるのは危険である。先取りすれば、江口にとつての共産主義とは、キリスト教の愛の教えの変形なのであり、江口が独自に思い込んだキリスト教を端的に生きようとした軌跡が、彼のいささかユーモラスな、しかし暗澹とした人生になっていたのだ。

そして何よりも、詩人研究であるかぎり、その作品を通してその精神の軌跡を実証しなければ、ほと

んど意味をなさない。正統であるか否かは別として、江口の戦後の精神の軌跡はキリスト教の側にあるのは事実であり、詩集『荒野への招待』をその根底で支えているものを追いつめようとするれば、キリスト教との関わりにこそ目を凝らさなければならぬ。

現在、長女の江口木綿子の孤軍奮闘ともいえる努力によって、『江口榛一著作集 全五卷』（武蔵野書房）が刊行されている。

## II 詩集『荒野への招待』の世界

一九五九年七月二〇日、昭森社から刊行された詩集『荒野への招待』は詩壇からはほとんど無視された格好になった。四五歳の江口自身がとうに詩壇的存在ではなかったという事実がある。が、それだけではなく、戦後詩の潮流からいえば、戦後詩が担ってきた思想的課題やその技法とは無縁の位置にあり、思想的にも技法的にも大正期の人道主義的な民衆詩派を継いでいると言えるだろう。しかも芸術的達成度にも疑問がある。

にもかかわらず、私がこの詩集を取り上げる理由は、たえず詩人でありたい、あろうとした江口の根底にある精神構造が隠れようもなくここには露わで

あり、かつキリスト教との格闘の内実が痛々しく露わだからである。その剥き出しの表現の素朴さ、率直さに、じつは詩人・江口榛一の悲劇があったと考えている。

では、たくさん詩を書いた江口榛一の作品の中から、何故この詩集だけを問題にするのかと言えば、全集（第一巻）の冒頭に収められているという理由もあるが、この詩人が辿り着いたキリスト教的思想の総決算でもあるからである。

全五九篇で構成されたこの詩集には、部立ても章分けもない。「あとがき」も初出一覧表もないので、作品の製作年を正確には押さえられないので、詩と共産主義、詩とキリスト教との関わりを正確に跡付けることは困難である。が、子細に読んでいくと、漠然としつつも、詩人がある方向性をもって作品を並べている、と思わずにはいられない。すなわち世界と人生への態度の在り方を意識的に配置したように受けとれるのである。

#### その一 詩人の人生態度

冒頭の「激流にて」は、いわば詩人の人生態度の表明として受け取れるはずである。

全篇引用する。

たぎち泡だつ流れのままに  
はるばると流れてきた くだつてきた、  
みなかみにしなやかな枝を伸ばしていた若いいつ  
ぼんのはしばみの  
そのいちまいの青い葉であるわたくし。

ある時は 流れにはげしく巻きこまれ  
ある時は おのずと流れに浮かびながら  
下流へ下流へと流れてきた、  
あたかも流れやまぬことがわたくしの  
さだめのすべてでもあるかのように。

しかし流れやまぬことが  
漂い 永久にとどまらぬことが  
母なる枝からあらしにもがれた薄い木の葉である  
わたくしの  
死までのさだめとするならば

ああ そのみか死までのさだめだとするならば  
わたくしはやはり流れよう、

流れのままに漂いながら、

下流へ下流へ 未知なる海へとはこぼれよう。

——たぎち泡だつ流れのままに

否、むしろたぎつ流れにさきだつて。

へはしばみへは、詩人の愛した榛の木である。ペンネームにも使っている。つまり江口榛一の人生態度の表明なのだ。へ母なる枝へとは何者であるのかは、まったく問われていない。母（根源）への郷愁も回帰も描かれてはいない。ひたすら流（さ）れてきた木の葉なのであり、最終行にあるように、へ流れにさきだつてへ流れようと宣言する。詩人にはへ未知なる海へしか辿りつく場はない。しかし目的地でもない。漂泊というよりは、流れること自体を運命としてしまった詩人の無頼な悲壮感のほうの色濃い。詩人はむしろ、へ激流へとへたぎつ流れへを知っているし待ってもいる感じである。

このような素朴な人生詩は、当時の詩壇ではすでに発想も技巧も古すぎて相手にされなかっただろう。江口のほうも詩壇的評価を期待していなかった。無頼を生きてしまった詩人の覚悟だけがここにはあるのだが、この素朴な表現からは、少年のような無邪

気さが迸っている。

その二 キリスト教的神のイメージ

二番目は、「未知なる者が」である。未知なる海が目的地でないにしても未知なるへ者へと書くとき、詩人の内部には、ある劇的な実感がある。

未知なる者が呼んでいる。

嵐のように ある時はおもてにまともに吹きつけ  
ある時は 巖に激する怒涛のように咆哮しながら  
いつもわたくしを呼んでいる。

荒野の方へと呼んでいる。

なんじが創る者なる詩人なるが故に  
なんじの持てる燭のひかりの消えぬうちにと  
荒々しく いかずちの如くはためく声で。

あらゆるなんじの持ち物を捨て

なんじの親しいすべてのを者のかたえを去り  
激流に抗して流れをのぼれ！

日ごと夜ごと呼んでいる、

なんじに鞭うち、すべてすでに名ある者らに  
別れを告げよと。

電波の如くわたくしの内部を貫きながら。

キリスト教に少しでも触れたことがあれば、この詩の背景に新約聖書があり、ことに荒野のヨハネが下敷になっていることに気がつくだろう。へ未知なる者へが人格的に応答する神のイメージであることも明々白々。ただし、二連のへなんじが創る者なる詩人へをどう解するか、微妙である。へなんじへは江口であるから、江口榛一が詩人を創造するという意味になる。詩人という存在に過大な思い入れを抱く江口の素顔がここには透けている。一般的に詩人はみなそうだろうと思われがちであるが、江口の場合とくにこの傾向が強く、歴史を見通す言葉を預けられた預言者という定義を江口はエッセイにも繰り返し返している。

### その三 詩人という定義への跳躍

この定義を生きられるかという苦悩よりは、生きべきだという確信の方がスローガンと化するとき、日常が破壊されるのではないだろうか。荒野のヨハ

ネでありたい、否、であるという確信の孕む危機である。

へある日ちまたの雑踏が私の心をとらえてから／私は私の幽居を捨て／はだして焼けた舗道に立ち、／声をからして みずから「荒野に呼ばわる者」となった（「かつて私は」より）。詩人すなわちヨハネという図式的信念に跳躍する時、日本の詩人の現実的課題（思想、表現、技術）からずれ込んでしまうのである。図式的信念は、図式的であるゆえに極端になりやすい。理念に殉教することが再生であり復活であるという浪漫主義の罫であるが、それが死と復活のキリスト教の恣意的解釈によって成立してしまうのだ。

へ激流のなかで詩が要求する、／ぼくたち詩人が詩のために身を躍らせてほるぶことを。しかし／詩はまたぼくたちに教えてもいる、／その時にこそ桂のかむりが／初めて／ぼくたち小さな詩人の頭（こぶ）にもかざされるだろうということ。／たとえそれが現世の人の目には見えなくとも……（「つねに身を躍らせよ」より）。へぼくたちへと複数でいつてしまふ安易さに江口は気がついていただろうか。

死の浪漫化と怯えは、この詩集のあちこちに見ら

れる。そして、へおれも死におびえる一羽の小鳥ではないだろうか、／生活の 実存の梢がころもとな  
い。／（ほら こんなに揺れてる）／運命よ 僕に  
もとどめの弾をうて！」（運命よ僕にも」より）。江  
口に必要だったのは生活からの跳躍ではなく、とど  
まることであつた。詩人という定義への跳躍ではな  
く、詩を書くことで跳躍すべきであつたはずである。

もちろん家族への生活への意欲は見られるが、詩  
人すなわち生活無能力者という確信に呪縛されてい  
るかぎり生活の建設は遠い。そこに見えているのは  
死への誘惑であり、死による自己浄化である。とし  
て論理のあやうい落とし穴が待ち構えている。詩人  
であることの自己正当化である。

へそこが最後の絶壁だつた。／幾日もとどまつて  
岩に足場をもとめていた。／かろうじてひとつの割  
れ目に手がふれた。／空が見えていた。運命のその  
固い岩の割れ目の向うに。／浄福の青い空だつた。  
しかし／ぼくはそこで墜ちた。／岩がおくつきとな  
つた。／ぼくはいま かばねの時間の落葉によこた  
えて、／はじめて物思わぬ存在となることができ  
た。／ああ この永遠の憩い！／何時かまたぼくと  
おなじようなたびとが／力つきてここでためらう

だろう。／登攀者よ、その時君のピッケルで岩根の  
土を払つてみたまえ、／詩そのものと化した肋骨  
が／揃つて 現われ出まいものでもない。』（碑  
銘」）。

#### その四 自然の位置

詩と死の一体化を受け入れてしまった詩人の活路  
はどこに残されているのだろうか。

それは思想でも信念でもない。ぎりぎりに追い詰  
められたとき、しばしば日本人を襲う自然の美しさ  
である。江口も例外ではない。ただし自然の背後に  
神を結びつけることは忘れていない。

へ以前はほんとにまれだつたが、／このごろはわ  
たくしにも自然と自分の生命が／合一し奔騰するの  
をしばしばかんじる。／その時自然はわたくしにす  
べての秘密をひらいて見せる。／略／その時／佇立し  
たわたくしの口をついて詩が生まれる、／まるで自  
然よ御身がそれを生むかのように。』（「何気なく道を  
歩いている時」より）。この（御身」という人格的二人  
人称には神の匂いがする。自然と神との二重性が強  
まっていく過程で、江口の神秘主義的傾向が高まっ  
ていくのである。ただし危険性も伴う。自然すなわ

ち神という図式に嵌められていくとき、神の超越性が薄らぎ、私と神が接近し、ついに合一してしまうのである。江口の自叙伝『背徳者』（一九五七、四三歳）は、私生活の赤裸々な告白小説であるが、悪の自覚はあっても、何者かに凝視されているという怖れがほとんど感じられない。社会的道徳観念に対する背徳はあっても、神の前での背徳にはなっていない。キリスト者になっても、キリスト教的罪と悪とを峻別する厳しい自覚はないといってもよい。

#### その五 榛一のキリスト教詩の限界

死と復活は連続ではないはずであるが、罪の自覚と赦しの体験がなければ、容易に連続してしまうのである。その極限にゴルゴダが出現する。江口の代表作である。と同時に江口榛一のキリスト教詩の限界をも示している。

#### ゴルゴダにて

いま、手首に釘を打ちこまれた。

足首にも。ふとももの辺にも一本ずつ。

痛みはすこしもおほえない。

私は歓喜をおほえる。胸ぬちに泉を湧きいずる

この歓び！

この日のために生きてきたのだ。

三十数年、悔いはない。

目ある者は見、耳ある者はきくべし。

ひとりの人間の意志が、

ひとりの人間の創造力が、いかにはかり知れない

かを示すために

私は売られるにまかせたのだ、

この十字架を最後のその証<sup>あか</sup>し<sup>あか</sup>の場として。

神は私がつくつた。

彼は私の被造物だ。

私の血潮がかよっている。私そのもの、

否、私以上に私を越え、はるかに厳かに、永遠そ

のものにまで高まつた。

果して然るか。いまその実証をしようというのだ。

槍が目の前で交叉した。

そうだ、その穂先でひばらを突きさすのだ。

鮮血が噴き出すのがわかる。

何とすがすがしい歓びだろう。

胸に芳香がみちてくる……。



いまこそ呼べ、

我とわが造りなした神にむかつて、否、私以上に

私なる者にむかつて。

エリ・エリ・ラマ・サバクタニ！

答はなかつた。

あやまつたのだろうか、私は。

ゲッセマネの夜を思い出した。あの時もやはりそ

うだつた。

群衆がどよめいた。笑っているのだ。

(私を売った彼ら。彼らのために祈ろう。)

神よ、神よ、永久にかの人らを恵みたまえ……

：

祈りも終らぬ時であつた、

すさまじい白光に天地が裂けた。

その巨大な一本の白光柱が私を呼んで、おお、

天へと私をはこび去る、はこび去る！

この詩をどう読んだらよいのだろうか。詩人の定義を生きようとして絶望し、死と復活を連続させた江口榛一は、預言者ヨハネと一体化したばかりでなく、神をつくつた創造者としての詩人となり、つい

に新しいイエスとなつていったのである。キリスト教側から発言すれば、神を冒瀆する詩人と断罪されることまちがいないが、江口の精神の軌跡として受け取るならば了解できる。ここまで至つてしまった江口の悲惨こそ受容しなければなるまい。

この精神構造の背後にあるものを、吉田時善は、「江口がこの詩をつくつたのは、昭和二八年、千葉・小中台町の馬小屋のような住宅で、一家心中をしようとしたり、生まれたばかりの女の子を他家にやつたりした頃であつた。わたしは、この詩を読み返しながら、江口は、「地の塩の箱」運動に行き詰まり、書齋で縊れて死のうとする前も、これを口誦んだのではないか、と想像した。この詩の「私」は、イエスであると同時に、おそらくは、彼自身でもあつたのだろう。彼は、イエスが十字架で死ぬことによつてキリストになつたように、自分の味わつたかすかずの悲惨が、あるときとつぜん、栄光に転化する瞬間があるのでないかという、心の底の方に秘めた願望と期待をもつていた。それは、ぜつたいに口にしてはならない願望であり、目に見えない毛筋ほどのかすかな期待であつたけれども。」(「地の塩の人」『新潮』一九八二年三月号)と述べている。

四十一番目のこの「ゴルゴダにて」を書いたあと、受洗した江口は半年で教会を脱退している。つまり受洗する以前に彼のキリスト教は完結してしまっていたのである。彼の限界と異教徒的理解を断罪するのは簡単であるが、彼が何故キリスト教を必要としたのかは明らかである。このような詩を書いてしまった江口は、これ以上詩を書く必然性を失っていく。この詩集も「ゴルゴダにて」以降は宗教的緊張感は見られない。

#### その六 少年詩との呼応

ただし、江口の詩のもうひとつの分野であった少年詩に心理的には近い作品はあり、江口の特徴である素朴さと率直さが生きた詩はある。詩としては、次の作品のほうが質的に高い。

#### ある冠のうたえる

あの時

野辺をあるいておいでになつたとき

みあしをひつかいたのはわたしでした。

あなたはふとあゆみをとめ

すんだ微笑で こういわれた、  
—— おお つばみをつけている  
花になつた頃またこようね……

兵士の手に わがねられているわたしを見て  
思いだされたようですね、

あの時の いじわるなばらがわたしだつたこと  
を。

わたしは身をちぢめる。

せめてこんどだけは あなたの皮膚をきずつける  
ことのないようにと。

兵士らよ

心して主しゅのみつむりをかざれ！

この詩人はたくさん少年詩を書いた。その中の一篇「窓」は、中学校の「国語 三」（一九六五年、日本書院）に採用されている。が、筆者は、江口の少年詩をあまり評価できない。「少年」の定義が概念的でありすぎるからである。

しかし、「ある冠のうたえる」は例外である。これは少年詩の文体を借りたおとなの詩である。イエス

の磔刑を素材にした西洋詩は無数にある。その中に、十字架に使用された樹木を描いた秀作もある。が、日本人にはきわめて稀であり、とくに荆の側から書かれたこの詩は、エロティックでさえある。江口のイエスに対する親愛感はこのように激しいのであるが、少年詩の形を採ったことによって、清らかな美を形成しえている。

### その七 抑制の美

最後になったが、詩集の最終部分にある五十六番目の「背中」を紹介する。これも少年詩に近い佳作である。

ひとつの背中が見える。

ルパシカを着、鎌とハンマーを持つている。

君は誰だろう、

十二の使徒のひとりだろうか。

ぼくの行くところかならず君がさきにある

ぼくの振りかえるところかならず君の背中がある。

背中だけしか見せない君。

しかしいつも君の足取りは確固としている。

磐石を悠々と押して行く。まるでトロッコをでも

押すように。

ぼくは君のあとに木を植え草花を植える、

時には葡萄の蔓をはわせもする。

たいそう艱難辛苦して、然したのしいその仕事を

ぼくはどうか成就する。

背中だけしか見せない君。

そんないとまもないだろうがいちど振りむいて見

てくれないか。

君に見てもらいたいばかりに

つたないぼくがどんなに額に汗してはたらき、

どんな花園を 果樹園を こしらえつつあるかと

いうことを。

いつも見えるひとつの大きな

光彩陸離たる背中。

ぼくはその背中に限りない親愛を寄せる。

前に立つていちど握手してみたいと思う。

「君」が誰であるかは、読み手に任せればよい。

神であつてもよい。「君」の顔を見ることはきつとありえないだろう。君の正体を追及することなく、こちら側の親愛だけを描いた抑制の効果がこの詩を好ましいものに行している。詩人江口には、午前十時のような、このような素朴さと率直さが生涯あつた。

実人生と詩の関係のさせ方を詰めて考えなかつたことが、江口の大きな失敗であつたが、視点を變えてみれば、キリスト教との出会いがなかつたならば、もっと悲惨な生涯になつていただろう。

### Ⅲ 求愛

詩集『荒野への招待』は、江口榛一 の精神構造の实体を晒け出した告白書であり、生きることの荒野へと読み手を招いて、生きる苦しみを分かち合いたいと願つた求愛の詩集でもあつたのである。